校長室だより～燦燦～ №４２２

１０秒間

2021.9.9

東京オリンピックで日本は数々の金メダルを獲得した。その中には、女子ソフトボールの金メダルがある。開幕戦は、福島のあづま球場だった。復興五輪を掲げる大会の象徴とも言えるものだった。３９歳になる上野由岐子投手の熱投、その後を継ぐような２０歳の後藤希友投手の活躍、ノーエラーの鉄壁の守備陣など、１３年分の思いがこもったすばらしい試合の数々は、今でも記憶に新しい。

それぞれの選手の活躍に目がいくのは当然のことだが、チームには指導者がいる。日本代表監督である。宇津木麗華監督が、次のようなことを言っている。

私たちはきつい練習を乗り越え、怪我を抱えながら、生活のすべてを捧げてソフトボールをやっています。何のためかといえば、それは勝つためです。勝った瞬間のわずか１０秒。あのめまいとも似つかない１０秒間のために戦っているといってもいい。それは勝った人しか分からない喜びであり、楽しさです。その楽しさを知り、勝つための執念を燃やし続けられる人が本物の「プロ」だと思います。勝った瞬間の１０秒間以外は、すべて苦しみかもしれませんね。

代表監督としての重責、プレッシャーは言葉にできないほど苦しかったし、神経もだいぶすり減った気がします。でも、その苦しさに負けない人がプロじゃないかと私は思うんです。苦しさに負けない。それは自分に負けないことだと思います。私のソフトボール人生を振り返れば、まさに自分との闘いでした。人じゃない。弱い自分、くじけそうになる自分に、もう一人の自分が「頑張れ、頑張れ」と言い続けてきた。

生きるって、最後は自分ですよ。夫もいるし、親や兄弟も友人もいる。みんな励ましてくれるし、勇気づけてくれるけど、私にはなれない。踏ん張って、最後に頑張るのは自分なんです。だから生きることは自分との闘いだと思っています。

今回のオリンピックでは、メダルを取った、取ることができなかったにかかわらず、日本選手の皆さんの人に感動を与える活躍を見せていただいた。前々回あたりのオリンピックからだろうか。選手の皆さんのコメント力が上がっていることを感じたのは。話せる若い選手が増えている。

全く個人的な考えだが、数ある種目の中で、女子ソフトボールが一番日本らしいと感じた。日本のよさ、日本人らしさが出た金メダルだった。女子ソフトボールチームのメンバーが、復興の地、福島で２試合を戦ってくれたことは、ありがたいことである。

それにしても、わずか１０秒間である。それは、他の１０秒間とは全く違うものであり、他では味わえない１０秒間である。金メダルを取った１０秒間、それはどんなものなのだろう。